

眠れぬ夜の百歌仙夢語り 〈七十六夜〉

忙しくて昼間洗濯ものを干せない時がある。仕方なく夜中に干そうとしたら「お月さまの匂いがつくからやめなさい」

と娘（次女）の希望のぞみに一喝された。

なるほど、そうかと頷いたら続けて「かぐや姫にも笑われるし」だと。いろいろな考えがあるものだと感じ。

手をつないで寝たら同じ夢が見られると思うほどバカではないが、常識派でもないようだ。

年賀状を書くつもりが脅迫状を書いてしまった一昨年も、はや記憶の彼方。年明けから母の一周忌法要を終えてホツとしているが、親不孝な娘たちにはいつも手を焼いている。ジイジとバアバ。神経戦は心が休まらない。

「バアバ、具合でも悪いのかな。まだ寝ているから起こして

きて」と孫の樹いっきに頼んだら「起きて」というべきところを、何を血迷ったか「生きてーっ」と叫んでいる。

おいおい、勝手に殺すなよ。

衣替えがあるんだから「子供替え」や「孫替え」があってもいいんじゃないかとバアバに提案したら「もつとひどい子がきたらどうするのよ。返品きくの？」というから私はきっぱりといいました。

「きつとクーリングオフがあるさ」

「オレオレ詐欺にあうかもしれないし」

「その時は、ボケたふりすればいいだけ」

そんなことを言っている間に世界は大混乱に陥っていた。

希望的観測がとんでもない結果を産むという見本が、US Aトランプ大統領の登場だろう。民主主義の落とし穴が見つかったわけだ。ドナルド・ダックが世界を混沌の海にぶち込みやがって！

おっと、我が家のトランプは大丈夫だろうか。へっ？それは誰だって？ 口が裂けても言えません。想像にお任せします。

花金だというのに気分はブルー。マタニティでもないのにどうしてかな。こういう時は気分転換するに限る。いつもの

ように酒瓶片手に地下世界にもぐるとしよう。

そうだ、前回、大伴家持について少し書いてみたけど、残尿感のまま出てきたトイレ（汚くてごめん）みたいな物足りない部分があったので、今回もその続きをチヨロチヨロと（やっぱり残尿感だ）。

さて真面目に！ 万葉集に家持の歌は約二百二十首載っているが、とりわけ彼の持ち味が出ているのは天平勝宝二年以降に作られた作で、巻十九に多いというのが一般的な学者先生方の見解である（おいらはアカデミックな考えは嫌いだ。これって自己分析すればコンプレックスだろうな）。

さて、お立合い。越中国守として六年の赴任がようやく解け、家持さんが都に帰って来たのは翌三年八月。この時家持は少納言になっている。つまり任が解ける一年ほど前に優れた歌がまとまって生まれたということになる。きっと心の重荷がなくなることになって軽やかな歌心を遊ばせることができたということだろう。

春の野に霞たなびきうらがなしこの暮影ゆふかげにうぐひすなくも

わが屋戸のいささ群竹ふく風の音のかそけきこのゆふべかも

ともに万葉集、巻十九の歌だ。どうだろう、この繊細な叙情性は。初期の作品と比べてもはるかにしなやかで優雅だ。やはり才能のある人は違うなあというのが偽らざる感想だ。もちろん私如きが偉そうに太鼓判を押したところで何の足しにもならないが。

春まけて物悲しきに三更さよふかけて羽振き鳴く誰が田にか住む

これも巻十九にある歌だが、決定的に以後の新古今集と違うのは、「誰が田にか住む」といった叙景に傾くところだろう。しかし上の句「春まけて物悲しき」というところなどはまさに家持らしい寂寥感が出ている。進歩してるじゃん。

この歌は「とび翔ける嶋を見て作る」というト書きがついているので、山本健吉によれば、

わが苑に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

という大伴旅人（万葉集、巻五）などの歌から「余情」の感覚を学んでいるのではないかと推察している。

春の日に張れる柳を取り持ちて見れば京みやこの大路おも念ほゆ

卷十九にあるこの歌にもト書きがついている。「二日、柳の黛をよじて京師を偲ふ」というもので、柳の連想から中国趣味が見て取れる。また「柳黛」とは黛をつけた眉を指す造語のようだ。これから当時の宮廷での好みが分かるうというもの。

ところで美人の定義というものはお国柄や生活、文化によって大きく異なるものだが、当時の日本では豊満な肉体を描いた唐風の美人が好まれたようだ。こちらも唐の影響の大きさが分かる。

その証拠に正倉院にある樹下美人図が示している。六隻の屏風で聖武天皇の遺品とされているが、下張りの文章から、天平勝宝四年に日本で書かれたことが分かっている。

樹下に唐風の装いをした眉が太く豊頬で濃い頬紅、衣服の線も緩やかな丸顔で肥満タイプの美人が岩に腰かけたり立って会話を交わして(?) いたりする。一説には光明皇后をモデルにしたのでは、と言われている。つまり当時の美女というものを代弁している、男たちの嗜好の表れといえる。

楊貴妃を歌った白楽天の長恨歌に「温泉水滑らかにして凝脂を洗ふ」とあるように唐の玄宗時代、楊貴妃がそうした美人だったらしい。

さて私がなんでそんなことを書くのかと疑問の方もおられよう。実は我がマグロの女房殿がまさにそのタイプを絵に書いた体形をしているからだ。ただし美人かどうかはこの場合問題外である。蓼食う虫も好き好きなどとは言わないで欲しいな。あなたの命の保証はしませんぞ。

おっと脱線してしまったようだ。修正しよう。

今週の泣ける話をご紹介します。

最近胃の「燃費」が悪くなったせいか体調が思わしくない。毎週土曜日には市民プールで千メートル泳ぐことにしているが、水から上がると息も絶え絶え、目の前が真っ暗。オレオレ詐欺に一千万円（そんな金どこにあるんじやい）持って行かれたようなだらしのないジジイになる。

家に戻ってグンニヤリ、ピテカントロプスの形に化石化している、口の悪い次女と孫がこれ見よがしに舌打ちする。

「あれっ、ジイジが即身仏になってる」

「その歳で不整脈があるんでしょ。いい加減ラーメンにマヨネーズ入れるみたいなバカはもうやめたら？」

「バーコードハゲちやびんは頭の上のハエを追うより水虫を先に治せよ」

マグロの女房殿までが追い打ちの一言。

「暴走タクシーは人を撥ねるまで止まらないわけ？ 責任だれがとるのよ」

オイラはマヨネースか？水虫か？暴走タクシーってか？寄つてたかつて散々な言い方だ。もう朝のゴミ出し、してやらないからな、パンツ干してやらないからな、水虫うつしてやるからな、と密かに拳を握って決心する私でありました。

一家の大黒柱から枯れ枝になった瞬間からはや十一年。この家族愛に満ち溢れた連携プレーの仕打ちには思わずうれし涙。オイラのヤケクソの決め台詞はこれだ（ひねくれているなあ）。

「A5ランクの霜降り神戸牛みたいな褒め方をしてくれて感動したよ」

家族愛とは出刃包丁で鉛筆を削るよりも難しいと知った瞬間だった。脳味噌に予防接種をしておかないと人間やつてらんねえ！マジで（おっと、若者言葉が出た）。チェッ、また地下室にもぐるとするか。

*

昔の切り抜き帳を見ていたら、面白い新聞記事にぶつかっ

た。ひよっとして以前にもここで書いたかもしれないのだが記憶がないので書いてみることにする。

東経大の教授だった石丸晶子さんが「法然が後白河法皇の第三皇女で歌人としても名高い式子内親王にあてた返書を読み、八百年の長きにわたって取りざたされてきた内親王の隠れた恋の相手は、藤原定家ではなく法然であったのではないかと推定」したという。

もちろん今では定家とは親子ほども年が違いすぎるし、そもそも歌舞伎の演目になったことから「恋人Ⅱ定家」説が流布しただけで、定家Ⅱ恋人説は完全に否定されている。

そこで石丸は私淑している古代学研究所の角田文衛教授に自分の仮定を話したところ「法然でしたか。それでわかりました。内親王をめぐる謎が解けていきます。僧侶であれば内親王とも対面できませんし、法然であれば恋が実らぬのも当然ですよ」と言われ「先生のこの第一声を伺った時のうれしさは忘れられない」と書いています。

もちろん一つの仮説にすぎないが歴史の謎を想像することの面白さを再認識した次第。でも日付を見たら二十数年前の記事だ。この説が受け入れられたかどうかは定かでないし責任は持てない。

古いものを引っ張り出すと面白いものが出てくるようだ。

これに触発されて本棚の奥から20代の頃に買った神西清全集（文治堂書店、全四巻）を引っ張り出し読み返してみた。何しろ編纂が川端康成、小林秀雄、竹山道夫、中村光夫、中村眞一郎、福永武彦、三島由紀夫というのだから凄い。改めてこの今では忘れられかけている、詩人で作家の作品を味わってみた。

「深夜の姫君」という詩の一部文を挙げてみよう。

ちゆうりつぷが蜜を垂れ

銀盤の上に蜜を垂れ

水色の星の旋律が

涼風に揺られつつ

豎琴の音をふるはせる

（中略）

頁を繰る音が

冴えきつた空気を二つに裂き

ふとかへりみる姫君の顔かんぼせの

瞳の涼しさに、

白蠟の騎士は、また揺らぎはじめ

右の詩は初連と終連のみを書きだしてみたものだが、神西は文語体の詩も口語体の詩も書いている。おしなべて叙情の人であると思う。大正、昭和、過渡期の文学を引きずっていることは否めない。よくも悪しくもロマンティズムの残滓がぶんぶんと漂ってくる。

仕方がないことだが、正直なところ小説も一時期流行ったフランスかぶれというか、どこか時代遅れの感じがしないでもない。

ところで、この全集には付録がついている。第一巻には昭和二十四年七月号「表現」所載の座談会が冊子としてはさまっている。実はこれが面白いのだ(神西さん、ごめんなさい)。

ちよつと拝借してみる。出席者は釋迢空、日夏聡之介、三好達治、神西清の四人。

日夏が「萩原(朔太郎)は好きだった。あれのよい所は古典に對して無知だったことだ。それが強味なんだよ。だから彼がおれの所によこす手紙は誤字だらけだ。何をいつてゐるのかさっぱりわからない」

すると三好が「さうなんだ。あの人は特殊な人だから、その萩原さんがある場合成功してゐることも、實は後の人の躰きになつてゐるな」という具合。さらに、

日夏「名前をいふのは差控へるが、(詩人には)俗物が多い

でせう。あいつは俗物のゾの字もなかった」

三好「随分間違ひやでたらめをいふ人だったが」

(中略)

日夏「前橋に行くと、萩原の馬鹿息子といはれてゐたと歯に衣着せぬ、本音で語っているから面白い。

釋も言う。

「啄木の方がいい加減な生活をしてゐるが、先に出ている。

啄木が出てゐなければ宮沢賢治も出てゐなかつたでせう」

返す刀で白樺派の志賀直哉も、武者小路実篤も、宇野浩二も文章が下手だとバツサリ。

加えて日夏は「上田秋成といふのは友人でも片っ端からやつつけたやつ。(中略)實に何ともいへぬ、鋭い冷たいものがぴんと来るような男だな。それは雨月物語の文調の中に出てゐる」

まさに言いたい放題の感がある。

第二号の付録は昭和二十九年十月号「群像」所載の三好、神西の対談だが、こちらは凄く真面目なイメージがある。日本語の可能性という部分ではこんな具合だ。

神西「万葉とか新古今の時代は、形式は今の詩に比べるとずっと貧しいと思ふが、響はあつた」

三好「日本の古典ほどどこやら見すばらしいものはないと

思つてゐます。だから問題は日本語の可能性を新しく創造的に多少無理押しにもおし拡げてゆくといふこと（中略）。それよりも日本語には解析能力が非常に缺けてゐること。そのことの方がもつと問題ぢやないかしら」

神西「つまり論理的な要素といふこと」

三好「さう、論理的要素、論理的な精神に均合つた詩的言語、語彙語法といつていいかな。さういふものの建設のためには、ある種の破壊作業を伴ふだろうね」

二人の詩に対する姿勢が垣間見える。これなどは保守的な現代詩に対する苦言と捉えてもいい。考えてもみれば非常に貴重な資料と言えるだろう。

しかし当時はこの座談会、どれだけ反響があつたのだろうか。興味があるぜ。

地下からオルフェオスのごとく地上に出てみれば俗物がうようよ徘徊している（オメエだって俗物の塊じゃねえかと、どこかから聞こえる）。

テレビのクイズ番組を見ていたら、再挑戦する回答者に司会者が「名誉挽回ですな」と言つたので驚いた。「汚名は挽回、名誉は回復だろう」とつい怒鳴つてしまった。

よく「喧々諤々」けんけんがくがくという人がいる。これも使い方が間違っ
た例だ。正しくは「喧々囂々」けんけんごうごう「侃々諤々」かんかんがくがくでそれをチャンポ
ンにしてしまったわけだ。前者はやかましい、後者は正しい
ことを主張することだ。先日、朝日新聞にこの間違いを見つ
けてしまった。天下の大新聞でもあるんですねえ、こういう
ことが。

ついでだからよく間違えるものをもうひとつあげよう。
詩集を出すときに、尊敬する先生や先輩詩人に「跋文を書
いて下さい」とお願いする人がいる。これって失礼なことな
のを知っていますか？ 跋文とは自分と同格か目下の人に書
いてもらうもので、そうでなければ序文かあとがきにするの
が正しいのだ。昔、作家の和田芳恵が先輩作家の小島政二郎
に「跋文」を頼んだところ、そうたしなめられたという逸話
が残っている。

おっと、そんなことは「他山の石さ。自分には関係ねえ、
俺は間違えねえよ」などと思ったあなた。その意味こそ間違
っているのですぞ。本来は「他人のつまらぬことでも自分の
いましめにする」というのが正しい解釈で、「詩経」にあるよ
その山から出た粗悪な石でも自分の宝石を磨くことができる、

という意味なんですから。

こんなことを偉そうに書くと「命あつての物種」と言われそう。いやいや「因果は巡る、でしよう」と言つて下されば幸いですが。毎日が「会稽の恥をすすぐ」ように生きている身には辛いご時世です。まったく。

待てよ、この使い方は正しいのでしょうか。酔っぱらいは死なず。ただ消えゆくのみ。

春をへてみゆきに馴るる花の陰ふりゆく身をもあわれと思ふ
(新古今和歌集、雑上)

長のご静聴ありがとうございます。アルコールもだいたい体に注入したことだし、これで今夜は久しぶりにぐっすり眠れるっていうもんだ。